

パネルディスカッション 原子力情報発信の今

原子力安全システム研究所 社会システム研究所 副所長 小坂 隆

原子力安全システム研究所は、1992年3月に関西電力の100%持ち株会社として設立、1年前に福井県美浜に社屋を移し、現在はそこで研究活動をしている。当研究所が設立したのは、美浜発電所二号機の事故の1年後でのことである。

研究所の特徴は、第三者的な立場で客観的に研究をする、関西電力だけでなく広く内外に研究の成果を公開し社会の発展に寄与する、技術的側面だけでなく人文的な面から原子力の安全を考える、の3点に要約できる。

当研究所の研究は大きく3つのプロジェクトに分かれているが、今日は、特に「社会意識プロジェクト」と呼んでいる、原子力発電に関する社会意識ならびに公衆の態度についての調査研究の成果を紹介しながら、原子力の情報発信の問題に触れてみたいと思う。

3～5年おきに定期的な調査をしているが、1993年と1998年のデータはその定期調査時のもの。1995年はもんじゅの事故の2か月後、1997年は東海村の火災事故の2か月後に簡単な方法で取ったデータであるが、これらを見てみると、エネルギー源として原子力発電を利用することについて、「安全性には多少不安があるけれど現実には原子力の利用はやむをえない」としている人が50～60%の間で常に動いている、ということに注目している。

いろいろな事故や事柄についてどの程度不安を感じるか、という質問については、交通事故がトップにきていて、わずかの差で環境破壊が続いている。次が原子力で、飛行機事故とか列車関連の事故はかなり低くなっている。原子力も地球環境問題も人々の不安というものにはかなり大きく出ているが、社会生活を送っていく上で一番危険だと感じていることは何か、という質問に対して884人に自由記述式で回答を求めたところ、トップが交通事故の466件、2番目が地震の138件、3番目が火災で58件となっている。環境問題に関しては、地球環境問題55件、身の回りの公害関係10件、原子力は放射能関係を含めて10件となっている。

人間の心の中にあるものの因果関係を定量的に把握できないか、というチャレンジを始めている。原子力を使うべきかどうかが一番大きな影響を与えられるのは原子力に対する恐れであるが、0.53と一番大きく影響している。経済性の認識0.27、エネルギー不足の認識0.16、自分の生活水準をどのようにしたいか0.20となっている。それでは、原子力に対する恐れは何かからきているのかといえ、国と電力会社への信頼から、安全認識を経て恐れへつながっている。

電力会社の発信したコメントをA社、B社2つ作り、回答者はそのどちらかのコメントを読み質問に答える、という方法で信頼に関する調査をした。最初と最後はA、B社とも同じで「わ

が社の原子力発電所は、これまで大規模な放射能漏れ事故を起こしたことはありません」「わが社は絶対そのような事故を起こさないように最新の注意を払い、万全の策を講じています」という文章。真ん中に挟んであるのが、A社が「この実績からも分かるように、わが社の発電所は絶対に安全です」、B社が「原子力発電所事故は一度起きれば大変なことは重々承知しております」というものである。二十数項目の質問のうち、11項目に差が出て、10項目はB社の方が良かった。

結局、研究の結論としては、「謙虚な姿勢と自信を持った主張」をいかに両立させていくかということになるかと思う。原子力について、何を通して信頼したか、という調査では、テレビ・新聞が断然トップ。原子力についてどこから情報を得たのか、という質問に対して、テレビ・新聞がまだトップだが、学者先生40%、電力会社35%となって、反対派の2.5倍になる、ということでこの両者ががんばって情報を発信していただきたいと思っている。

電力中央研究所 経済社会研究所 主任研究員 土屋 智子

電力中央研究所は、電力会社に共通する課題を研究する機関として設立され、電力会社からの寄付金で運営されている。私の所属する経済社会研究所では、技術とは全く関係なく経済分析やエネルギー政策の評価をしている。

家庭のエネルギー消費の変化を見ると、ここ30年から40年の間にずいぶん変化しているが、社会調査が専門のInglehart博士によれば、エネルギー消費量が経済的豊さを支えているものであり、エネルギー消費量が伸びるに従って平均寿命が急激に伸びてきているということである。

価値観の分類にはいろいろあるが、私が首都圏と中国地方の2つの都市、1,600人を対象に行った調査によれば、「自分のことは自分で決める。自分の意見をはっきり言う、自主的傾向を示す軸」、「公共への協力を優先する。秩序・協力を重視する社会的協調性の軸」、「快適志向」の3つの軸で表されそうだという結果が出た。この3つの軸で1,600人を、「非常に協力もするし自分の意見もはっきり言う」、「協力はあるが自分の意見はあまり言わない」、「生活の見直しをする」、「社会への協力より個人の自由を重視している」、「協力もしないし発言もしない」という5つのカテゴリー分類した。一番多くの人たちは、に属している。に属する人たちは、環境エネルギー問題については、生活の見直しで解決したいとしている。に属する人たちは、あらゆる問題に関心がないと答える傾向にある。

科学技術感について、これら5つのタイプで全く違うという結果が出た。のタイプは、科学技術が有用でもないし不安もある、従って科学技術に頼りたくないという人たちである。一番多いのタイプの人たちは、科学技術は有用であり、不安もないと思っている。しかしながら、このタイプの人たちはあまり自分の意見を発言していないので、極端な意見が出てくると、世の中の人たちすべてが科学技術に不安をもっている、ということになるのかもしれない。

のタイプの人たちは、有用だけど少し不安がある、と非常に微妙なところにいる。このタイプの人たちは、科学技術にはちょっと不安があるが、社会のためならそれを受け入れなくてはならないという発想になるのだと思う。そして、科学技術は進歩しているが、エネルギー問題については省エネと新エネルギー開発を重視してもらいたいという意見がほとんどだというのである。

ところで、私が所属するある委員会の調査によれば、原子力が必要だと思っている人の割合は、この10年ほとんど変化していない。10年後の主要エネルギー源に関する質問については、反対派・賛成派共に、原子力に依存しているだろうと答えている。一番気にかかるのは、原子力が安全だと思ふ人の減少。原子力に関心を持っている人について、分析をしてみると、「安全上どちらとも言えない」という人の割合が、原子力発電所の立地地域で増えている。特に、この地域の女性や若い人々に疑問派が増えているのが、私は問題だと思っているが、これらの人々は情報をたくさん入手している。電力会社のパンフレットも届いている。安全だと思ふ人は、電力会社や国のパンフレットを信頼できる情報だと思ふのだが、これらの人々はパンフレットを信頼できる情報源だとは思っていない。

それでは情報提供をどのようにしたらいいかということであるが、当所が行った環境エネルギー問題についての調査によると、パンフレットには都合のいいことしか書かれていないということも回答している。このところが、まさに信頼にかかわることである。一番問題になるのは、国や大企業の情報を信頼できると答えている人が5%にも満たないということである。大新聞やNHKの情報がずっと信頼されている、ということで私の話を締めくくりたいと思う。

元福井県副知事 渡辺 智

福井県は、昭和45年に若狭湾の軽水炉発電所が発電を始め、その当時は、新聞も「第三の火が点る」というような言葉を使い大いに歓迎した。それから28年たった現在の状況は皆さまざま承知の通りであるが、どういうことで変化が起きたのか。この間、いろいろと事故が起きたが、原発は安全だと聞いている。ところが、新聞報道は、ただ今のお話ではだいぶ信頼があるということであったが、私たちが見ると過剰であると思われる。「厳しい」のは悪いことではないが、「正しい」かどうかになると、首をかしげることもある。

例えば、「もんじゅ」の事故の際、ナトリウムが漏れて、これが空気や水に反応すると大爆発が起きると書かれたが、専門家に聞くと、そういう理論は存在するが、「もんじゅ」の場合はナトリウムが漏れたからといって爆発するようなことは絶対ないと言われる。記者の方はそういうことをきちんと調べたのか疑問を抱く。新聞の報道によって、旅館の予約が取り消されたり、魚が売れなくなったりする。弁償してくれと言うと、証拠を見せろといわれ、結局泣き寝入りということになってしまうのである。

事故が起きた場合は直ちに心配ないのなら、心配はいらぬ、という情報を発信していただき

たい。マスコミにポンポンやられると、シューンとしてひたすら陳謝する。謝ると、内容はともかく、危ないんだなということになり、悪いイメージがついてしまう。福井県は、現在 15 基の原子力発電所を抱え、とにかくこれらの原子力発電所と共生していかなければならない。外から来た人は、「原発銀座」と冷やかすし、マスコミは「もんじゅ」の事故直後、若狭湾で原発の何かというと、拍手というようなこともある。原子力の安全性について、国にはっきりしてほしいと頼んでいるが、依然として、国はそういうことに答えてくれない。

原子力の避難訓練というのがあるが、この件に関しては無意味なことのようと思われる。原子力の訓練というものは、まず事故を想定しなければできない。ある発電所からこういう事故があって、放射能がどれくらい出たかということを示さないと訓練はできない。私は、事故が想定できるのは、つくった会社と国の 2 つしかないと思う。地方公共団体には能力がない。

先ほども述べたように、原子力に関して国にいろいろ質問したが、回答がない。このようなことをやっておいて、信頼を持ってといわれでも絶対だめである。もっと腰の低い、責任を持った態度で情報を発信する、それが一番大事だ、と言い続けてきたが、いまだに実現していない。

京都大学大学院 エネルギー科学研究科 教授 吉川 榮和

私は、1981 年までの 7 年間、旧動燃の高速炉の安全性関係の研究に携わっていたが、その時最も印象に残ったのが、「もんじゅ」と「ふげん」という研究開発段階の原子炉の名前の由来である。もんじゅはライオンの上に乗っている知恵の仏さまで、ふげんは象の上ののっている慈悲の仏さまであるが、猛獣のもっている潜在的な能力を知恵と慈悲でコントロールするのは原子力開発の悲願だということにつけられたようであるが、私は、これらは人を上から見るような仏さまであるので、観音さんとかお地蔵さんという仏さまにしたほうが、親しみがわくのではないかと思う。

確実な安全と確実な危険の間に、どちらともつかない領域があるが、中にいる者は確実な危険でない限り危険が回避されるというのでよしとするが、外側から見ると、確実な安全でなければ全部危険だと見る。東京電気通信大学の田中氏が『マルチメディア社会の諸相』で、何かトラブルが起こったときに、中と外では見方が違う問題については、これは安全・不安全という本来の問題ではなくて、全体を見た時の、中と外のシステムの整合性がないことに尽きる、との考えを述べている。

もんじゅは永久停止してほしいとの 21 万人の署名が集まったということで厳しい状況であるが、ここで国のあり方が気にかかる。原発が立地あるいは隣接する自治 37 市町村では、原子力安全委員会の改革要求を決議するが、本当に国民の期待にこたえた安全の規制をやっているかどうか不安であるから、もっと根本的に改革してください、というものである。アメリカの原子力規制局（NCR）では、数千人の人が安全規制に携わっているが、そのようなものを参考にして組織の再編成を行うか、あるいは全く別の組織をつくれ、といったような話にまでな

っている。行政改革によりいろいろと組織が再編成される予定であるが、原子力に関していうと、それぞれがどの省庁に属するのかということが、不透明になってきたので、マスコミの方々には、よくウォッチして、社会に知らせていただきたいと思う。

信頼回復の方法については、動燃のような研究開発をしているところの安全問題と、関西電力のように実用炉を運転している場合の安全問題が混同されているが、分けて考えたほうがよいと思う。研究開発しているものは何をやってもいいのか、という問題もあるが、国・地方公共団体、メディア、それらに携わる人々が一度原点に戻って、原子力の平和利用を民主・自主・公開の三原則に則してきちんと行われているかどうかの評価・監査・是正をするとともに、社会的重要性とか必要性についての公正な認識と評価を行い、できるだけ公正に内外に伝える。こういうところが国民の適正な判断力の涵養にいいのではないか。大学も同じ立場で教育、研究に携わっていくことが大事だと思っている。

日本経済研究所理事の方が投稿されていた2日前の新聞記事によると、科学技術の進歩があって、それにより今後日本におかれているすべてのエネルギー問題、環境問題、高齢化問題といったものを解決していく上でカギになるような新しい技術ができて、日本社会の経済的な発展を支える。これは、私も全くその通りだと思う。公共性のある機関がこういうふうに新しいものを紹介して、また発信していくというのが大事ではないか。

毎日新聞 解説委員 横山 裕道

渡辺氏が副知事時代に経験したことについて、意見が2つに分かれていて県民がどちらを取った方がいいか迷ってしまうということであるが、私は、一般論から言うとむしろいいことではないかと思う。ただ、地元が困るということはわかる。渡辺氏の意見について、私もマスコミとして反省しなければいけないことがたくさんある。

住民が二つに分かれては困るし、国もはっきりしてくれない、しかし原子力の専門家は安全だという点について、一言言いたいのが、われわれ新聞社が一番困るのは、何かあったときに、一人の意見ではすまされないということである。原子力を担当している学者は、もうどちらかに色がついている。両方の学者に聞かないとも客観的な報道にはならないという気がする。その中で、福井県が「おれたちの判断力はこうだ、こういう独自の道をいくのだ」というのは難しいと思うが、何か独自性をもってやっていくことがあってもいいのではないか、というふうに思う。